

坊さんは、さんぼうの助のいったのはこのことだなあと思い、あらかじめ用意していつけておいた、五平という小僧に飼犬を「五平今だぞ」といって放たせた。おとふれ狐は、ばけの皮があらわれ、犬に追われて山に逃げ、最後にはかんこの疵をひって姿が見えなくなった。

他方さんぼうの助は、旅には出たものの、どうしても夢見が悪いので、京まで行かないで途中から引返してきて、この話をきいてびっくりした。「何んとも御礼の申し上げようがない。お蔭様で大切な巻物が助かった。何か御礼をしようと思うが、狐の身では何もできない。幸いぼけることは上手であるから、芝居をやってお目にかけます。しかし何といっても獣の身、坊さんに、思わず有難い念仏など唱えられますと、たちまち逃げちつてしまいます」「決していわないから、ぜひ見せてくれろ」ということになって、夕方になって坊さんが河原にでかけてみると、たちまち大きな舞台がかかり、どんとどんと太鼓がなりひびき、芸題は平家物語、熊谷敦盛の段でここで「一の谷の戦敗れ、平家の公達、助船に乗らんとして、海の方に落ち給う：」となる。これが敦盛をくみふせて、直実がつきさす段になると、坊さんは、あまりに真にせまっているので、約束のことも忘れて、思わず「南無阿弥陀、々々々」と念仏を唱えてしまった。

さあ大変、舞台はがたがたと崩れ、明りは消えて、たちまちもとの河原になってしまった。そこへさんぼうの助が現れて「坊さん、あれほど頼んだのに、どうして念仏を唱えられましたか」「ほんとに悪かった、もう決して唱えないから、もう一度だけみせてくれろ」「決して唱えてはなりませんよ。もう一度だけ集めてやらせてみますから」と念を押して始めた。たちどころに舞台がかかり、また先の直実、敦盛の段になると、またつい坊さんは念仏を唱えてしまった。さんぼうの助がまた現れて、「今度こそ集ってきませんよ」と念を押した。坊さんも、それほど尽してくれても、思わず唱えてしまったのだから、これで終りにしましょうと。ざっと昔さかえ